世界に羽ばたく国際コミュニケーション学部

中国語検定 5級を取得

小林 あいさん（3年次）

国際コミュニケーション学部異文化コミュニケーション学科では、複数の言語を学び多様な文化について理解を深める。小林あいさん（国コミュ3）＝写真＝は入学後、本格的に中国語の勉強を始め、2年次の秋には中国政府公認の中国語検定試験「漢語水平考試（HSK）」5級を取得した。今年3月から8月まで、学部の海外研修留学で台湾に。「学んだ中国語を生かし、失敗を恐れずに、たくさんの人と交流したい」と話す。

さまざまな言語を学びたいと、異文化コミュニケーション学科に入学した小林さん。1年次から中国語、英語のほか、インドネシア語、ドイツ語、ベトナム語にも取り組んできた。

同学科は全員の留学を必修としているが、コロナ禍のため、小林さんたちの学年は1年延期された。その時間を有効に使い、留学前に検定試験に挑戦しようと2年次になる前から本格的に勉強を始めた。5月に4級、10月に5級を受験し、見事合格。HSKは初級の1級から最難関の6級まであり、中国語が専門の土屋昌明教授によると「5級は半年以上の留学後に取れるようなレベル」だという。

「失敗恐れず、たくさんの人と交流したい」

台湾の国立中山大学に留学中の国コミュ2、3年次生

小林さんは「日本語と中国語の表記の似ている部分を発見し比較するのは楽しい」と話す。語学上達のコツは「音読をして書き取るのが一番」だという。

とはいえ、中国語話者と話すとスピードについていけないことも。留学先の台湾でも「最初は自分の会話力・語彙力が低くて苦労した」という。徐々に地元の人たちと交流が広がり、今ではプライベートな会話も楽しんでいる。

「異文化コミュニケーション学科は、複数の言語を学べることが魅力。授業以外でもグローバルフロアで海外の新聞を見たり、神田古書店街でさまざまな国の書籍を探したりするのも楽しみ」と充実した学生生活を送っている。

2022年度千代田学

活動まとめた冊子完成

2022年度千代田学「文化的多様性を持つ千代田区の国際性に関する調査・研究」の成果をまとめた冊子が完成した。学生と地域の人々そして世界各地の人々を結び付けようという試みで、国際コミュニケーション学部の根岸徹郎教授が研究代表を務め、同学部異文化コミュニケーション学科の教員や学生たちが参加した。

千代田学は、区と区内の大学などが連携し、さまざまな事象を多彩な切り口で調査・研究する。今研究では、学生たちがフィールドワークやグループワークに参加した。

メキシコ大使館との連携による「死者の日」シンポジウムと祭壇の作成（10月）、フランスのクリスマス飾り「クレッシュ」の展示（12月）、市民ボランティア団体・江戸東京ガイドの会との連携による永田町ツアー（1月）などで、学生たちは文化的多様性や歴史について体験しながら学んだ。また、複数のゼミが都市社会学などの観点から神保町界隈でフィールドワークを行った。

冊子ではこれらの活動を紹介するとともに、教員によるコラムも掲載した。

さらに、地域コミュニティづくりを応援するサイト「ちよだコミュニティラボ」でも活動内容を動画で紹介している。

代表を務めた根岸教授は「冊子は活動の記録であるとともに、千代田区の持つ多様性・国際性を見直すためのガイドでもある。学生の知的好奇心への軌跡であり、これから更にこのテーマを深化させ、次のステップへの足掛かりになることを願う」と語っている。

本学ホームページでPDFを閲覧できる。

▶ PDFはこちらから

今年度はほとんどの授業が対面で行われており、キャンパスにはコロナ前の活気が戻った。写真は生田キャンパス8号館屋上。

ドキュメンタリー映画『ハマのドン』特別試写会

監督の松原特任教授

制作の思い語る

制作意図を話す松原特任教授

テレビ報道の分野で長年活躍する文学部ジャーナリズム学科の松原文枝特任教授が監督したドキュメンタリー映画『ハマのドン』特別試写会が4月19日、生田キャンパスで開かれ、学生や教職員が鑑賞した。

横浜へのカジノ誘致を阻止するために立ち上がった「ハマのドン」こと藤木幸夫氏に密着した作品で、松原特任教授は、「今取材していることが後々どういう意味を持ってくるのか、分からないままにカメラを回し続けた」とドキュメンタリー制作の難しさ、先入観を排除して取材に臨む姿勢の大切さを語った。

鑑賞した和田嘉悠さん（文3）は「カジノ関係者の証言など、この問題に関して初めて知る話も多く、興味深かった」と感想を述べた。

映画は、5月5日から全国公開されている。

23年度長期交換留学プログラム（第2期）

奥村経世国際交流センター長（右）とプログラムに参加する7人

2023年度長期交換留学プログラム（第2期）の留学生が決まった。留学先と派遣期間、氏名、学部学年は次の通り。（敬称略）

【英語圏】

■オレゴン大学（米国、6月～24年3月）
山崎莉咲（経済4）▽才津真稀偲（経営2）▽中野さくら（文3）

■カルガリー大学（カナダ、4月～24年4月）
佐藤彩（法4）▽藤原光希（商2）▽岩本彩花（国コミュ4）

■ダブリン大学トリニティカレッジ（アイルランド、6月～24年4月）
佐久川栄登（経済2）

専修人の新しい本

環境財務会計各論

植田敦紀 著

環境財務会計領域では、環境会計情報を財務会計制度の中で適正に認識することを追究する。本領域全般については2008年拙著『環境財務会計論』において論考済みであるが、それから15年経過し、その後の社会情勢の変化に対して各論を追筆刊行した。

具体的には、11年東日本大震災に伴う福島第1原発事故による土壌汚染の会計、今後廃炉が進む原子力発電施設の廃炉の会計、更に39年ごろ太陽光パネルの大量廃棄が予測される太陽光発電施設の除去債務の会計、また温暖化対策として市場メカニズムを利用した排出量取引および各種カーボンクレジットについて論述した。

私自身の研究は、環境会計、環境財務会計、サステナビリティ会計へと進み、本年『環境会計各論』、本書、『サステナビリティ会計論』の3冊の刊行に至った。広い視野で真に社会において必要な会計を探究していきたい。（専修大学出版局・税込み3740円）

著者（うえだ・あつき）商学部教授。会計学、サステナビリティ会計研究。

事実はどこにあるのか 民主主義を運営するためのニュースの見方

澤康臣 著

報道と広報を分かつのは何か。ニュースとSNSの差は何か――ジャーナリズムがなぜ必要かを考える書である。

実例を多数紹介した。東京医大の女性差別入試、富山市議たちの政務活動費不正など調査報道の裏側も、米国で倫理問題の論議となった報道も実在するエピソードの「実録」を基本とした。

本書は「民主主義の『運営側』」という生硬な表現をあえて繰り返す。私たち市民は社会のお客様ではない、主権者であり参加と自治の主人公だと訴える。そこに報道の、エンタメや生活情報を超える意味がある。

だから良い報道を渇望する市民でありたい。そして、そんな市民になろうとする学生たちの支えにしてほしい本である。（幻冬舎新書・税込み1100円）

著者（さわ・やすおみ）文学部教授。新聞学、ジャーナリズム研究。